

大学生の授業レポートに見る 教育の課題と希望 第二回

西 伸 之

第二回のテーマは、『教師』

2017年から新潟大学教育学部で「道徳教育論」の授業を担当しています。授業では、中学校社会科教師の経験と、30年近く続けている「アーベルの会」(新潟県子ども発達と不登校を考える会)の活動、さらに組合役員の経験をもとに、道徳を窓口に、教育や教師について、また子どもたちについて語ってきました。授業後提出される大学生のレポートから、今日の教育の様々な課題や希望が見えてきます。そのことを『大学生の授業レポートに見る教育の課題と希望』と題してまとめ報告する場をいただきました。

第一回(前回)は、「他者の考えに触れる」他の学

生のレポートを読んで」と「小中時代の道徳授業の思い出」を取り上げました。自分の考えや意見を率直に伝えたり、他者の意見を聞いたりする体験が非常に乏しい実態と、新鮮で刺激的なその経験が何よりの学びとなっていることや、道徳授業の危険性と可能性を、彼らのレポートを通してお伝えしました。

第二回は、『教師』です。

深刻な教員不足の背景

教育学部ですから、将来は教師や教育関係の仕事をめざしている学生ばかりだと一般的には思われていますが、かなりの学生がそれ以外の就職を選択しているのが現実です(詳しい数は把握していませんが)。報道

されているように、教員希望は減り採用試験の倍率も低下し続けています。精神疾患等で休職・退職する方が増え続け教員が不足し、授業や学校の諸活動に深刻な影響が出ています。

その最大の原因は、教員のひどい働き方が、改善どころか放置され悪化の一途をたどっていることです。授業、授業準備、学級指導、部活指導、生徒指導、教育相談、行事準備、さまざまな事務作業など、勤務時間内では終わらない仕事量の多さ。それをこなすために時間外勤務手当なしの長時間労働を強いられ続けてきたひどい労働環境はほとんど変わっていません。増え続けるいじめや不登校への対応も求められ、発達障害の児童生徒への支援や保護者からの様々な要求に答えなければなりません。それに加え、GIGAスクール構想・ICT教育の推進で上から一方的に導入され活用を求められているタブレット、小学校の英語やプログラミング学習の開始、コロナ感染対策など、新しい仕事が続々に入ってきています。文部科学省が、ベテラン教員から若い教員や学生に、「教員のやりがい」を伝えてほしいと始めた「#教師のバトン」に、「教師のやりがい」ではなく「教師の悲鳴」が膨大に寄せ

られたというニュースは、事態の深刻さを物語っています。

教育学部に入ったものの…

教育学部には、最初から教師をめざさないという学生もいますが、多くが教師や教育関係の仕事をめざし入学してきます。しかし、大学で学ぶ中で教師の難しさや大変さにふれ、報道や先輩から耳聞きするネガティブな情報の渦に巻き込まれるうちに、不安が募り自信を失い、「教師になる」という気持ちが萎えてしまう学生が増えています。「いい先生に出会い憧れて」「子どもたちに勉強を教えたくて」「つらい思いをしている子の力になりたいくて」教師をめざしていた若者が、不安に押しつぶされ進路を変更していくのはとても残念です。一方、「教師になる」という目標はあるけれど、「どんな教師になりたいのか」は考えたことがないという学生も多いのが実態です。

私が語り伝えたこと

それらを踏まえ、私は授業で、自身の経験や同僚の経験を紹介しながら、次のようなことを語りました。

* 教師は、子どもたちの成長を支え促し寄り添う、やりがいのある素晴らしい仕事である。

* しかし、報道されるように、また私の体験からも、教師は大変な仕事であることは間違いないし、その働き方や待遇は早急に改善されなければならない。教育条件整備や勤務条件改善、教員増は喫緊の課題である。

* いろいろな子どもたちにはいろいろな先生が必要。「教師はこうあるべき」に囚われ「自分にはできない」と思わないでほしい。挫折体験や弱さの自覚が、子どもに不安に共感し力になることもある。

* 教育の成果は、数値ではかからないものやすぐは結果が出ないものもたくさんある。卒業しおとなになってから、「先生が伝えたかったのはこういうことだったのか」と気づくことだってある。

* 「教師になる」ことが大事なのではなく、「どんな教師になりたいか」が大事。

* 多様な世界で生きていく子どもたちには、多様な世界を伝えられる先生が必要。自身の体験や学びのすべてが教材になる。自分を豊かにすることが、子どもたちへの何よりのプレゼントになる。

* 教師の仕事はチームプレイ。一人で抱え込まず、

教師それぞれの個性を生かしあい協同で取り組むことで、子どもたちは成長できる。

小く高校で出会った教師の思い出や、大学入学後に感じてきた教師という職業と仕事に対する気持ち、私の授業を受けて考えたことを、いくつかのテーマに分けて紹介します。

「教師の思い出・教えられたこと」

心を育ててくれた先生

「教師自身の体験は何よりの教材」という話が印象に残りました。私にも中学校の先生のおかげで価値観が広がった経験があります。中学校のその先生は、生徒にたくさん自分の経験を語って聞かせてくれました。その先生は旅行が好きで、世界各国に旅行に行った話を聞かせてくれたり、その土地のお土産を見せてくれたり、時には飛行機が飛ばなくなつて始業式に間に合わなかった失敗談などもしてくれました。そんな話を聞くうちに私も海外に旅行に行つていろんな土地を訪れてみたいと思うようになりました。また、その先生はとても自由奔放で、毎日勉強と部活の決まりきった学校生活を送つていた中学生の私には、とても羨まし

く輝いて見えました。先生が話してくれる話や写真、現地のもので見ただけでも、自分の世界が広がるように感じたのを覚えています。私も多様な経験を積み、人生を楽しんでいる姿を児童生徒に見せられる先生になりたいなと思いました。

気かけ、話を聞いてくれた先生

私は中学の時に本音で話せる教師が二人おり、どちらも自分の話を興味深そうに聞いてくれる先生でした。話を真剣に聞くことは、生徒に信頼感を与え、安心して相談してくれるのかなと思います。教師の一人は、たまに学校についての愚痴や悩みなどをつぶやいており、生徒から人気がありました。そういった自分の弱みを見せることも、信頼感につながるのかなと思いました。

児童・生徒への向き合い方、仕事への向き合い方を教えてくれた先生

中学校時代の二人の先生のことを思い出しました。その先生たちは、どちらともいわれる「問題児」といわれるような子どもたちの担任をしていました。ですが、一人の先生は、その問題児の子どもからとても尊敬され、もう一人の先生は、問題児の子どもたちから召使

のように使われているという印象を受けました。尊敬されていた先生は、子どもが悪いことをすればきちんと叱り、その子どもが何か問題を起こせば、一緒に謝りに行っていました。さらに子どもの家庭環境の悩みなども頻繁に聞いていたという話も聞きました。しかし、子どもに召使のように使われていた先生は、子どもが悪いことをしても、自分の見ているところでなければ知らん顔をしていて、子どもを怒っているような様子もほとんど見られませんでした。子どもの機嫌を損ねないように、自分は面倒ごとに巻き込まれないようにしていたという印象を受けます。先生たちにもそれぞれの事情があると思うし、問題に巻き込まれたくない気持ちはわかります。私も今塾で講師の仕事をしているので、子どもたちと接する中でどうしても「子どもに嫌われたくない」「知らないふりをしてしまえばいいのでは」という思いがあって、叱ることができないでいます。しかしそこで、勇気をもって子どもにぶつかれるか、愛をもって子どもに接することができるかが、子どもに慕われるかどうか、さらには子どもの中に何かを残せるかの違いだと思いました。私自身も意識しなければいけないことに気づかされました。

反面教師 こんな先生にはなりたくない

小学校1・2年の時に、算数で50マス計算を行ったとき、終わるのが速くてみんなに凄いいねと言われていた。休み時間に先生と話したとき、「スタートの合図の前からやってたんでしょ」と言われた。「違う」と言っても、しよせん小学校低学年の子が言うことと思われていたのだろう、先生は不正を確信したような表情だった。今でも思い出せるので、当時の私は相当ショックだったのだと思う。自分はそんな風にはなるまいと思った。

教師である親の影響

私の父は現在定時制の高校に勤めていて、全日制との違いなど興味深い話をします。今の学校では、遅刻してきた生徒には「よく学校に来たね。えらい」と声をかけるそうです。一般的な全日制の高校では、遅刻をしたら注意されるか怒られるでしょう。定時制でそういう声をかける理由は、心に闇を抱えていたり発達障害であったりする生徒や、一度不登校になつて勉強が追い付かなくなつてしまった生徒、何らかの理由で学校に通えなかつたけど学び直したいと望むおじいちゃんや、親の都合で日本に住む外国籍の子ら、多様な生

徒がいるので、個人個人に適した対応が求められるからだと思います。大変なことですが、個人に適した対応をすることは、定時制に関わらずどんな学校でも必要なことではないでしょうか。難しいのは十分わかりますが、業務内容の多さに気を取られて生徒個人を見つめることを忘れてはいけないと思います。

「不安はあるが・・・」

自分に自信がない

私は2年生になつてから専門科目中心の学習が始まつたこともあり、卒業後の進路を考えることが以前より多くなつた。もちろん、教師になりたいと考えて教育学部に進学してきたわけで、今も思ひは変わっていない。その一方で、教師になつてからの不安ことも多く感じるようになり、本当になれるのだろうかとも感じてしまうことも多々ある。その不安の一つとして、学級づくりに関するものがある。私自身、小学校、中学校、高校ととても恵まれた環境で過ごさせてもらった実感があり、クラス内でいじめがあつたり、極めて悪質な問題行動を起こす生徒がいたりということとは、(私の認識している範囲では)全くなかつた。だから、

実際に自分のクラスでいじめが発生してしまったときや学級が荒れているなど、自分にとって当たり前であった学校生活と異なる状況に出くわしたとき、適切な行動がとれるのか不安であり、怖いと感じていることもある。

「いろいろな先生が必要」で気持ちが楽になった

今回の講義での、「いろんな先生がいていい」という先生の言葉がとても心に残りました。私は教員志望ですが他の人と比べてしまい、不十分な面がたくさんあると感じていました。しかし、いろいろな生徒がいるように先生もいろいろな先生がいていいのだと思うようになりました。

「いろんな先生がいていい」という言葉がとても響きました。人はそれぞれ個性があるのだから、その特性が役割になるのではないかと思います。優れていると思う誰かに必要以上に近づこうとして、同じような人になろうとしなくていいですね。「私」の良いところに気づいてそれを伸ばせるような人になりたいと思いました。

「教師はチームプレイ」で心が軽くなった

私は、教員は全ての生徒との間に良い関係を保つ必

要があると考えていたが、今回の講義で教育はチームプレイであり、生徒にとつて色々な先生が必要なので、一人の教員が全てのことを抱え込む必要はないということが分かり、少し安心した。ある特定の教員と関わるよりは、様々な教員と関わり関係性を持つことによつて、生徒は偏つたものではなく多様な価値観や考え方を得られると思う。たくさんいる教員の中で、一人でも生徒にとつて心の拠り所になったり本音を打ち明けられるような教員がいれば、学校生活がより良いものになるのではないかと思う。

教育の成果を急がない

今日の授業では、「教育の結果は、ずっと後になつて表れるものが沢山ある」ということが特に印象的でした。私の中で学校の先生は勉強を教えることが主だと考えていたので、勉強をどのように教えたら伝わりやすいとか、教え方のコツみたいなものを重要視していた部分がありました。ですが、数値を追つて目先の結果を追求めるのではなく、周りの先生方と協力して、児童に全力で向き合う心持ちが私に必要なのかなと、新しい考え方を持つことができました。

「教師のやりがいとブラックな現状」

＜#教師のバトン＞

私も教員志望の学生として、現状を知りたいという思いで、たまに＜#教師のバトン＞を読んでいます。ほとんどのツイートが、「仕事量を減らしてほしい」「残業代を出してほしい」といった政府に対する不満や要望ばかりです。私の身近でも、今年から小学校教員になった先輩が仕事への不満をよく話しています。つい先日、もう鬱になる寸前で両親にも心配されてしまったというメッセージがきました。このような現場の声を聞くと、小さい頃から教師になりたいと思っている私でも、本当に教師になっていいのかという気持ちになっっています。職場に悩みを聞いてくれる先輩教師や同僚がいれば良いとは思いますが、それは実際に教師になって配属されてみないと分かりません。これから教育実習などが始まりますが、教育現場が変わらないままとしたら、「本当に教師になっていいのか」という不安な気持ちを、自分の中でどうしていけばいいのか分からなくなってしまうました。

ブラックな仕事？

教師の仕事環境ややりがいについての話がとても印象に残りました。特に「先生は『子どものため』と言われたら頑張ってしまう」という言葉は実感がありません。私の知り合いに今年新採用で教員になった先輩がいます。先輩は子どものことが大好きで、大学時代から子どもが喜ぶためのことを考えて勉強やサークル活動を行っていました。しかし最近、その先輩が鬱状態になっています。「子どものため」と言いながら無理をしすぎているからだと言っています。夜遅くまで仕事をしたり、子どもへの指導がうまくいかなかったことで落ち込んだり。「子どものため」に頑張ることは教員の仕事であるので大切だと思いますが、自分の体が壊れては元も子もありません。過度な業務を「子どものため」と思い込み頑張り続けること、それが当たり前だと慣れてしまうことは本当に危険だと感じます。そして、教員をそのような状況まで追い込むほどの業務内容の多さ、これが一番の問題です。教育委員会や文部科学省はこのような問題に真摯に目を向け、対策を練るべきだと考えます。

教職員同士の協力と職場の雰囲気

一人ですべてを変えていくのは難しいし、しかも新米の頃だと、変えたいと思ってもなかなか動きづらい環境にあると思います。大学生でも、自発的に動く人と言われないと動かない人で分かれると思います。が、教員に限らずどの職場でも、動くのはやはり誰かの為に何とかしたいという意思を持った人たちだし、一方見て見ぬふりとしてしまう人たちも出てくると思います。そのような人たちをいかに巻き込んでいけるのかも、職場の雰囲気づくりであり、お互いの配慮が必要な部分であると思いました。

「教師のやりがい」「教師になる」から、

「どんな教師になるか」を考える」

教えたい・寄り添いたい・支えたい

最近私は、「これが教育の面白さだ」と感じる経験をした。私は個別指導塾で塾講師のバイトをしているが、中3でも分数の計算や文字式が分からない子たちが多く、最初は、正直なところ「こんなに勉強できない子がいるんだ」と感じ驚いてしまった。私には中2の数学を教えている生徒がいるが、この子も小学校の

内容から怪しかった。だが、春休みの季節講習で文字式の基礎の基礎から復習したところ文字式が「わかる」ようになり、先日の定期テストでは自己「最高点を取れた」という。しかもこの季節講習以降、数学が分かるようになり、数学が楽しいと言っていた。教員の仕事の一つは、生徒の「わかる」「できる」を増やし、生徒自身のもつ「成長する力」を助けることなのではないかと感じた。

やりがいのある職業Ⅱ教師

授業全体を通して、教師という職業の素晴らしさを知ることができました。最近、教師という職業のブラツクな側面に触れる機会が多く、教師になる事に対して後ろ向きな気持ちになっていました。先生が実際に経験された問題事案のお話をお聞きして、現場で生徒と向き合うことの難しさも知りました。しかし、先生は難しさだけでなく、大変な時は周りの先生方と協力すればよいということ、生徒にまっすぐに向き合えば、生徒もきちんと応えてくれるということを教えてくださいました。教師という職業は人と人のつながりを感じられるとても素敵な職業だと思います。人よりも機械と向き合うことの多い職業もたくさんある中で、子

どもたち、保護者、同僚の先生方、地域の方など、これほど多くの人と向き合い一緒に活動ができる職業は少ないと思います。大変なことが多い職業であることには変わりないかもしれませんが、このような人とのつながりを感じることができれば、一人ではないと頑張れるような気がしています。まだまだ教師になることに迷いはありますが、この授業を通して、以前よりもずっと教師という職業を前向きに捉えることができるようになりました。

「こんな教師になりたい」

今回の講義で一番心に残った言葉は、「教師になることが大切なのではなく、どんな教師になりたいか」です。私は教師になることを目標にこの大学の教育学部に入りました。しかし、教育方法や専門科目などの勉強をこなし、来年以降は教育実習で実際に児童に触れながら免許を取って大学を卒業するということが、現在の目標になっていることに気が付きました。自分が本来持っていた目標は、子ども達が自由に発達し、将来この国で活躍できるような人材へと導くことができる教員になることでしたが、受験を受けて大学に合格すること、大学を卒業するために勉強をするという

目標が変わっていました。今の目標では子どもの気持ちを理解できない固い思考を持つ教師になりかねないということを、今日の授業で気づくことができました。学び、鍛え、自分の人生を豊かにしたい

教師自身の体験は、何よりの教材という言葉に納得した。それと同時に、もつというんなことを考えながら生活を送りたいと感じた。あつという間に時間は過ぎてしまうことは分かっているのに、何も考えないで生きていくとスカスカの人生になってしまう。良いことも後悔していることも含めて、これからもじっくりと色んなことを経験し、子どもたちにいろんなことを伝えられる大人になりたい。

「教師はこうあるべき」の囚われを見直す

4か月前、「自分に教師になる資格はあるのだろうか」という不安を抱いてこの講義に臨みましたが、今では暫定的にその答えにたどり着いたような気がします。講義が始まる前は、教師は聖人君子でなければならぬと思っていたので、自己肯定感の低さを筆頭に自分の性格などすべてをひくくろめて考えると、自分は教師になっていい人間ではないと感じていました。それでも、道徳教育論の講義の回が進むにつれて、

「教師は完璧でなくていい」「子どもたちと一緒に成長していければいい」「きれいなことを言うな」といった、私には新しい見方で教師を捉えることができました。まだまだ教師になることに不安はありますが、先生が講義で仰っていた、「ただ教師になりたいではなく、どんな教師になりたいか」を意識して、これから多くの事を学んでいきたいと思います。半年間、この講義では自分とより向き合うことができました。

「教師になりたい」

私が中学校教師を志すようになったきっかけは、今まで出会ってきた素晴らしい恩師たちの姿であり、教師という職業は「憧れ」から追いかけた夢でした。そのため、今までは、「自分は本当に教師になれるのだろうか」「教師としてやっていけるのだろうか」などといった不安に駆られることが多くありました。しかし、道徳教育論という講義を受けていくにつれて、「教師という職業のやりがい」や「学校教育現場には解決すべき様々な問題が山積みになっている」という現状を再確認することができ、改めて「自分も今まで出会ってきた恩師のような、生徒に寄り添うことができる教師になり、日本の学校教育現場が抱えている様々

な問題の解決や改善に少しでも貢献していきたい」と強く思うようになりました。また、「自分は教師になれるのかな」という今までの非常にネガティブな気持ちから、「生徒の声にしっかりと耳を傾けて、生徒に寄り添いながらハートで語ることができる教師になりたい」という強い気持ちへと変化してきました。さらに、教壇に立ち素晴らしい可能性を秘めている生徒たちを指導する立場にある教師を志す以上は、「教師になりたい」という中途半端な気持ちではなく、「絶対に教師になるんだ」という覚悟を決めた上で生徒たちとしっかりと向き合っていく必要があるのだと思いました。気持ちのこもっていない教師の言葉はすぐに生徒に見破られてしまうので、時には生徒の前で弱音も吐いて、必要な時には周りの教師や生徒に励ましてもらいながら、頑張りたいと思います。

(にし) のぶゆき・新潟市